



薬局ヒヤリ・ハット事例収集・分析事業 共有すべき事例

2025年
No.10
事例1

疑義照会・処方医への情報提供

用法



事例

【事例の詳細】

患者にフォゼベル錠5mg 1回1錠1日2回朝夕食後が処方された。処方監査を行った薬剤師は、新しく発売されたフォゼベル錠5mgについて事前に情報を収集していたため、食直前に投与する薬剤であることを把握していた。処方医に用法について疑義照会を行った結果、朝夕食直前へ変更になった。

【推定される要因】

フォゼベル錠5mgは新医薬品であり、処方医は用法の知識が不十分であった可能性がある。

【薬局での取り組み】

新医薬品が発売された際、予め添付文書に目を通しておく。



その他の情報

フォゼベル錠5mg/10mg/20mg/30mgの添付文書 2025年6月改訂(第4版)(一部抜粋)

6.用法及び用量

通常、成人にはテナパノルとして1回5mgを開始用量とし、1日2回、朝食及び夕食直前に経口投与する。以後、症状、血清リン濃度の程度により適宜増減するが、最高用量は1回30mgとする。

16.薬物動態

16.2 吸収

16.2.1 食事の影響

健康成人（18例）に、本剤14mgを1日2回反復経口投与したとき、尿中ナトリウム及びリン排泄量は、空腹時投与と比較して食直前及び食後投与で低い傾向が認められ、糞便中ナトリウム及びリン排泄量は食直前投与で最も高く、本剤の薬力学的作用（消化管でのナトリウム及びリン吸収阻害作用）は食直前投与で最も高かった（外国人データ）。



事例のポイント

●フォゼベル錠は2024年2月に販売開始された高リン血症治療薬である。高リン血症治療薬は、腸管からのリンの吸収を阻害することにより血清リン濃度を低下させる薬剤であり、一般的に用法は食直前もしくは食直後に設定されている。フォゼベル錠は食直前に服用することで最も高い効果を得られる薬剤であるため、処方監査を行う際は用法が食直前であるか確認を行う必要がある。

●新医薬品を薬局で採用した際は添付文書やインタビューフォームなどを確認し、効能・効果、用法・用量、重要な基本的注意、禁忌、相互作用、副作用などの基本情報を把握しておく必要がある。さらに、薬局内のすべての薬剤師が知識を持てるよう、これらの情報は薬局内で共有することが重要である。

●本事業の第33回報告書（2025年9月公表）では「新規収載医薬品^{*}に関する事例」を取り上げ、フォゼベル錠に関する事例を分析した。疑義照会や処方医への情報提供に関する事例では、用法間違いの事例のほか、服薬後の患者の症状から副作用発現の可能性を疑い処方医へ情報提供した事例などを紹介している。
第33回報告書 分析テーマ【1】「新規収載医薬品に関する事例—フォゼベル錠、アポハイドローション20%—」

^{*}本事業における「新規収載医薬品」とは、報告された事例の発生月において薬価収載1年未満の新医薬品（医療用医薬品）である。



公益財団法人 日本医療機能評価機構
医療事故防止事業部

〒101-0061 東京都千代田区神田三崎町1-4-17 東洋ビル
電話：03-5217-0281（直通） FAX：03-5217-0253（直通）
<https://www.yakkyoku-hiyari.jcqhco.jp/>

※この情報の作成にあたり、作成時における正確性については万全を期しておりますが、その内容を将来にわたり保証するものではありません。※この情報は、医療従事者の裁量を制限したり、医療従事者に義務や責任を課す目的で作成されたものではありません。※この情報の作成にあたり、薬局から報告された事例の内容等について、読みやすくするため文章の一部を修正することがあります。そのため、「事例検索」で閲覧できる事例の内容等と表現が異なる場合がありますのでご注意ください。